

チベット大蔵経開版の経緯について

矢 崎 正 見

はじめに

いわゆるチベット大蔵経開版の次第は、従来、説かれるところによると、14世紀の初旬にナルタン (Snar-thañ) 古版の開版を見たのが、チベットにおける大蔵経彫造の最初であり、引続き、ツェルパ (Tshal-pa) 版、リタン (Li-thañ) 版等が開版され、その後、約 100 年を経過して、明の成祖永楽年間に中国においてナルタン古版を覆刻して永楽版が完成し、さらに約 200 年後、同じく神宗の万暦年中に万暦版が永楽版を底本として開版され、ついで1683年、康熙年間に北京版チベット大蔵経が完成したのである。一方、チベット本土においては、18世紀に入ってナルタン新版・デルゲ (Sde-dge) 両版の開版が行なわれ、引続いてチョーネ (Co-ne)・プナカ (Pu-na-kha)・クムブン (Sku-ḥbum) 等の各版の彫造を見、20世紀に入って、ダライ 13世、トゥプツェンギヤムツォ (Thub-btsan rgya-mtsho, 1876-1933) の治下 (1932)、最も近代における開版としてラサ (Lha-sa) 版カンギュール (Bkaḥ-ḥgyur) 部が世に出たとされているのである。¹⁾

本稿にあって究めようとする処は、上述のうち、チベット本土において最初の開版とされるナルタン古版について、これが従来いわれるように、現存する各種のチベット大蔵経のような形で実際に大蔵経の形態をとって開版されたものなのか否かという点を中心として、14世紀前半におけるチベット仏教界全般の趨勢の中から、特に、いわゆるナルタン古版開版の経緯を明らかにし、併せてチベットにおける大蔵経開版の歴史的先後について、その一端を探ろうとするものである。

1

従来いわれるごとく、ナルタン古版の成立が14世紀初旬であるとしても、チベットに仏教の初伝を見た時期から、この時代に到るまでの約 700 年間に、チベットにおける経典の翻訳は数多く行なわれ、しかも、この 700 年間には翻訳史における消長をも見たわけであるから、この間の流れをまず探ることとしよう。

周知のように、チベットにおいて経典の翻訳が初めて行なわれたのは、6世紀末から7世紀中葉にかけて在位したソンツェンガムポ (Sroñ-btsan sgam-po, -649) 王の時代と伝えられており、王によってインドに派遣され、在印 4年、チベット文字を創ったといわれるトンミ・サムボータ (Ton-mi sambhoṭa) が帰蔵後、中心となって宝器莊嚴経・百拜懺悔経・宝雲経等を訳出したのが最初とされている。が、本格的な経典翻訳事業が進められたのは8世紀に入って、チソンデツェン (Khri-sroñ lde-brtsan, 754即位—797) 王の時代、ならびに9世紀のレパチェン (Ral-pa-can, 815即位—836) 王の時代であった。特に9世紀に入っては、例の梵蔵対照の仏教辞彙である“翻訳名義集 (Mahāvvyutpatti-

Bye-brag-tu-rtogs-par-byed-pa chen-po)”の完成を見、梵文經典中の術語はもとより、經典名等をはじめとする各種の個有名詞等に対して、これに相当するチベット語の仏教用語が制定され、一方、デンカルマ (Ldan-dkar, 824) 目録をはじめ、いわゆる大蔵経目録の編纂が行なわれ、チベット語に翻訳された大乘・小乗の各種經典の名目・巻数・偈頌の句数等が調査され、蔵訳經典の散佚を防ぐことも行なわれたのである。が、レパチェンについて即位したランダルマ (Glan-dar-ma, 836即位—841) によって、チベット史上空前の一大破仏が行なわれ、その後は統一王朝を欠いた戦国の暗黒時代を迎えることとなり、そののち、約100年間にわたる無仏教の時代を経過して、10世紀の末葉に至り、リンチェンサムポ (Lin-chen bzañ-po) による秘密教の復興にはじまる、いわゆる後伝仏教 (Phyi-thar) の幕は切って落とされ、11世紀中葉におけるアティシャ (Atiśa, 980—1052) の入蔵と、彼を中心とするカーダムパ (Bkañ-gdams-pa) をはじめとする各派の成立、そして、13世紀に入っては、元朝、蒙古民族によるチベット制覇と、その庇護を受けたサキヤ (Sa-skya) 派によるサキヤ王朝の成立へと展開して行くのである。

これを要するに、チベットが有史時代に入ったソンツェンの時代から、ナルタン古版の成立を見たといわれる14世紀初旬までの約900年間にわたって、經典の翻訳について見る限りにおいては、個々にすぐれた翻訳者、たとえば上述の後伝仏教復興における立役者たるリンチェンとか、アティシャをチベットに招く上で活躍したギャトンセンゲ (Rgya-brton señ-ge) 等の輩出をみ、多数の經典がチベットの翻訳僧 (Lo-tsa-wa) とインドの学僧 (Paṇḍita) 達の協力によって蔵訳されたことは想像に難くないが、前伝仏教 (Sñā-thar) の末期に翻訳事業が国家的スケールにおいて行なわれ、その翻訳經典の整理がなされた以外は、特に大規模な經典翻訳がなされたことは考えられないのである。そして、この事実は後述のナルタン古版の成立の上で、何らかの影響を与えているのではないかと推測し得る根拠となっているのである。

2

さて、従来、説かれているナルタン古版成立の経緯であるが、このことについて、ジクメナムカ (Hjigs-med nams-mkhañ) の“蒙古仏教史 (Hor-chos-byuñ)”において、仁宗 (1312即位—1320) の項に、

「その後、Pō-yan-thō 王 (仁宗) は Sa-skya の大自性者 Don-yon rgyal-mtshan と名づくる者を供養所とした。この間に、Snar-thañ の Bcom-ldan Rig-ral の学識ある弟子、Hjam-dbyaṅs-pa が蒙古に来ているのを同じく供養所としたが、この人は Snar-thañ にいた時、仮面をかぶって、師の Rig-ral を驚かしたため、Rig-ral は喜ばなかったので、その後、(Snar-thañ を離れて) Sa-skya に移り、止宿していたのを、蒙古人が招いたのである。蒙古から、甘・丹両部 [Bkañ-bstan-ḥgyur] を作製するため [bsheṅs-thebs] の必要品を数多く、大いに送り、中国の良質の (墨の) 小箱等を (師に) 奉ったので、Bla-ma (Rig-ral) は又、喜んで、かくて送られた品物を用いて、Dbus の Blo-gsal 等は (Hjams-dbyaṅs の) 御心を奉じ、作製に当たり (bsheṅs), 甘・丹両部の作られたもの (Bkañ-bstan-ḥgyur bsheṅs-pa) を Snar-thañ 寺の文殊宮殿 (Hjams-dbyaṅs Lha-khañ) に納めることを願い、かくて、Hjams-dbyaṅs が道を開いたので、甘・丹両部は大いに増加したのである。」²⁾

と記されている。

このジッメの記述に対して、彼の蒙古仏教史の重要な基礎資料の一つである“蒙古源流”では、

「弟、阿格爾巴里特喇汗、乙酉年生。歳次壬子、年二十八歳即位。供奉有名之薩斯嘉錫里巴特喇嘛、仍遵前政宏図永固、在位九年、歳次庚申、年三十六歳歿。」³⁾

「その(グルマ・バラ=成宗の子、クルク=武宗)弟君なるブヤントウ・ハン(仁宗)は乙酉の年(1285)に降誕したまいて、壬子の年(1312)、御年28才で即位したもう。この君はサスギヤ・シリ・パダなる喇嘛を尊祈し、同じく、祖宗の例により、大玉統を泰平ならしめ、在位したもうこと9年、庚申の年(1320)、御年36才にてみまからせ給いぬ。」⁴⁾

とあり、その記述はすこぶる簡略で、ジャムヤンについてはもとより、ナルタン版甘・丹両部の成立等についても全く触れていない。同様のことは中国資料たる元史についても全同で、元史の24巻本紀24から、26巻本紀26までの3巻が仁宗の項であるが、その記述中に、ナルタン版に関する記載は見出せない。

したがって、ジッメのこの記述はおそらく、シュンヌペ(Gshon-nu-dpal, 1391—1481)のデプテル(Deb-ther sñon-po, 1478)によったものであろう。事実、デプテルの記すところによると、その記述の内容はさらに詳細であって、

「Snar-thañの隆盛期には、当時、三蔵を持するもの(Tripitaka-dhara)の3分の2はSnar-thañに集ったといわれているが、……この頃、大学匠のHjam-dbyañs(Hjam-paḥi dbyañs)もまた、Bcom-ldan Rigs-paḥi ral-griの弟子のひとりであったが、……」

という記述から始まって、満月の夜、悪魔の面をつけて師を驚かしたため、寺を追われて居をサキヤに移し、のち、蒙古に招かれてブヤントウ汗(Bu-yan-tu-qan・仁宗)の帝師として遇され、[このような環境のなかで地位の上からも、財力の点でも大いに恵まれたことと、一方、師のリクレに対する敬慕の念と、ならびにナルタンに対しての郷愁、捨てがたいものがあったためであろうか] 師に対して多くの贈物をし、師の勘気が解かれるのを待ったが、最後に支那墨を贈ったことによって、その怒りを鎮めることに成功したといい、ほとんど、ジッメと同じ記述がなされている。が、ジッメに記されているロセ(ジッメではBlo-gsal, デプテルではDbus-paのBlo-gsalという名で知られる大学匠)は、デプテルの記すところによるとジャムヤンの弟子で、リクレの孫弟子に当たる人となっている。ジャムヤンの師、リクレも古い書物の奥付を調べて、カンギュルの数章中の偈頌についての調査を行ない、また、テンギュルに収められるべき論書の分類を行なうため、“テンパゲバ(Bstan-pa Rgyas-pa: 論書を完全なものとするの意、論示広釈?)”なる書を著わしていたが⁵⁾、一方で、ジャムヤンは[師、リクレのこのような労作を知ったためであろうか] 弟子のロセ、その他の人に多くの贈り物をし、甘・丹両部の全巻をまとめて、ナルタン寺に収めることを委嘱したのである。ロセは師のジャムヤンの希望に応じて、翻訳官ソナムウセル(Bsod-nams ḥod-zer)ならびにギェンロチャンチュプム(Rgyan-ro Byañ-chub-ḥbum)等の協力を得て、甘・丹両部の写しを作り、ナルタン寺の文殊宮殿(Hjam Lha-khañ)にその全巻を収めたと記しており、この後、これを原本として多くの

複製が各地の寺院にそれぞれ、1部ないし3部位ずつ取められたことが述べられて、最後に、

「この事業は Bcom-ldan Rig-paḥi-zal-gri の弟子、Hjam-paḥi-dbyaṅs 師の努力に負うところであり、彼のこの事業は Rñog-lo-tsa-bā の好意によるものであり、Rñog はまた、Kashmir の学匠達の援助によって、これを行ない得たものであり、窮極的には仏陀の恩恵によるものと思わざるを得ない。」

と結んでいるのである⁶⁾。

なお、ジャムヤンの師、チョムデンについては、同じくデプテルに、

「Bcom-ldan Rigs-paḥi zal-gri は Pu-thaṅ の人、Bsam-yas の Mchod-rten dkar-mo の寺で出家し、Kāla-cakra の教義に反対してこれを仏教ではないといった。」⁷⁾

人としており、また、“フーランデプテル (Hu-lan deb-ther, 1346) では、その第6章、カーダムパ (Bkaḥ-gdams-pa) の系統の中で、ナルタン寺の歴代を記す項において、6代座主、サンジェゴムパ セングチャブ (Saṅs-rgyas-sgom-pa Seṅ-ge-skyabs) の代に、

「Dḥa-na-chi-la の弟子、Skel-nag-grags-seṅ が法相を教える学堂を設立し、Bcom-ldan-ral-gri 等が来た。」⁸⁾

と、ジャムヤンの師、チョムデンに触れている。

3

上述のデプテルならびにジッメの仏教史の記述を中心として、ナルタン古版の成立について、その様相を検討すると、ナルタン寺にあって、リクレのもとで修業中であったジャムヤンは、いわば、兎戯にも類するような行為のゆえに寺を追われ、サキヤに移っていたのが、蒙古に招かれて仁宗に仕え、その地位と財力を得たのち、師ならびにナルタン寺に対する報恩を目的として甘・丹両部の全巻をナルタン寺に納めることを考え、この希望が弟子のロセを中心とするナルタンパ (Snar-thaṅ-pa) 達によって実現され、いわゆるナルタン古版の成立を見たこととなるのであるが、ここで問題となることはまず第1に、カーダム派とサキヤ派の関係である。すなわち、上座部の正統派をもって任じ、カーダム派内でも特殊の地位にあって、学問寺としての矜持を持っていたといわれる⁹⁾ナルタン寺の人々がいかにかつてナルタンに属していたとはいえ、ジャムヤンの志を簡単に受入れて、甘・丹両部をナルタン寺に納めることに易々として力を貸したであろうかという点である。このことは、一旦、寺を追われたジャムヤンが、師リクレの怒りを解くために、さまざまな贈り物をしたが、なかなか、それを受入れられなかったというジッメ・デプテルの記述に徴して見る限りにおいても、簡単に首肯することのできない点である。大蔵経を開版するということは、チベット人達、特にラマ達にとっては、護法の一大事業であり、特にカンギュール (Bkaḥ-ḥgyur) の編纂は釈迦の遺命を集大成して、後世に残すという、重大な信仰的行為であり、彼らが、大蔵経をカンギュール部とテンギュール (Bstan-ḥgyur) 部に二大別し、仏陀の教勅としての經典・律部をカンギュール部に収録し、各種の全書類をはじめとす

るチベット人先師達の著作等を大蔵経中に入れず、蔵外とするのも、特にカンギュール部は神聖にして侵すべからざるものとするからであり、ましてナルタン寺の人々が、自己の居住する寺に納める大蔵経を、他派であるサキヤ派に近づき、蒙古の帝王に優遇されたジャムヤンの、その財力に依存して、開版したとするなら、そこにナルタンパとしての誇りの消失が感じられるのである。そして、このことが逆に、元朝をはじめとする蒙古側・サキヤ派の立場からは、元史・フーラン・源流等の諸書に、ジャムヤンのこの行為について、全く触れていないという事実からも、再考すべき点となるのではなからうか。すなわち、蒙古側、あるいはサキヤ派にすれば、ナルタンを追われ、おそらく不遇であったであろうジャムヤンを蒙古に迎えた立場からは、そのジャムヤンがカーダム派に属するナルタン寺に納める大蔵経の編纂に努力することは、納得のいかない行為であったであろう。大蔵経の開版を行なうとしたら、何故、蒙古内で、サキヤ派によって行なわなかったのか、大元帝国の財力と武威を裏楯とすれば、インドから学匠を招いて、その協力のもと、大蔵経の開版を行なうことも、さほど困難な事業ではなかったであろうが¹⁰⁾、ジャムヤンの、旧師リクレに対する謝罪と追慕の念の故にこれを許したという点については、何かしら蟠るものがあるように考えられるのである。ナルタン古版をチベットにおける最初の大蔵経開版とするなら、それがサキヤ派を中心として、蒙古で行なわれず、ナルタン寺に収めることを目的としてなされた理由は何とも不明である点を、第1の疑問とする所以である。

第2に、ジツメ・デプテルの記述を読み取った上で、上記の記述をナルタン古版の開版とみる点であるが、これを開版とするなら、後代において行なわれ、現存するナルタン新版・デルゲ版・北京版等の開版と同じ形態の開版と見ることができようかという点である。これまでに蔵訳された一切の経典・戒律・論書を集めて、それぞれ木版に彫り、開版するという事業が、はたして、ジャムヤン1人の財力によって可能であったらうか。しかも、従来行なわれなかった大蔵経の最初の開版という大事業が、いかに、仁宗の外護を得たとはいえ、個人的な財力と報恩の念のみによって人々を動かして行ない得たと考えることには若干の躊躇を覚えずにはいられない。ナルタン側の財政上の、また労力の上での協力があったとするなら、この場合は、開版の発起人としてのジャムヤンがすでにナルタンを離れた人であった点が問題となるのではなからうか。ジツメの記述によれば、

“Dbus-pa Blo-gsal-sogs kyis thugs khur bshen's te Bkaḥ-bstan-ḥgyur bshen's-pa Snar-thañ gi Ḥjam-dbyañs-lha-khañ du bshugs su gsol shiñ……”¹¹⁾

「ウの人、ロセ等は御心を奉じて、作製に当り、甘・丹兩部の作ったものをナルタン寺の文殊宮殿に納めることを願ひ……」

とあって、“組立てる・作る”の意に当たる“bshen-ba”の過去形“bshen's”という語が用いられているが、この語を直ちに“開版する”という意味には、必ずしも取れないと考えられる。また、“Bkaḥ-bstan-ḥgyur”，すなわち“甘殊爾と丹殊爾の兩部”という語も、現存するデルゲ版等における甘殊爾と丹殊爾の意味とは限らないであろう。たとえば、“Bkaḥ-ḥgyur”なる語はパサムジョンサン(Dpag-bsam-ljon-bzañ, 1741)において、

「Po-to-wa の2,000人に及ぶ弟子のなかで、最も顕著な Śar-ba-chen-po=Yon-tan Grags-pa は Bkaḥ-ḥgyur の108巻に及ぶ全巻を再現する程、完全な形で暗誦していたので、文殊菩薩の化身と考えられた。」¹²⁾

とあり、このシャルワチェンポは11世紀初頭の人であるから、もとより、この場合のカンギュルなる語は、現存のごとき大蔵経甘殊兩部を意味するとは考えられず、むしろ、mdo (經典) の意に用いられているのであろう。とすれば、上記の甘・丹兩部が作られてナルタン寺に取められたというのは、単に經典のみでなく、数多くの論書をも含めた一大集成がなされ、ナルタン寺に取められたと読み取ることも可能ではなかろうか。このことはまた、いわゆるナルタン古版の開版以後、次の北京版開版までが約350年、デルゲ・ナルタンのチベット本土における開版まで400年の年月を経ており、しかも、デルゲ・ナルタンの開版は1730年、31年と引続いている点からもいい得るのではなかろうか¹³⁾。さらに、上述のごとく、チベットにおける經典翻譯史の上からいえば、チベットにおいて經典藏訳の黄金時代は8・9世紀であり、ジャムヤンの時代とは500年以上の隔りがあるのであり、もちろん、この500年間に、アティシャの入藏をはじめ、多くのパンディタ達が印度からチベットに渡り、個々に經典の藏訳も行なったではあろうが、翻譯史そのものの中では、14世紀初頭におけるナルタン古版の開版という事業は、あまりにも唐突に行なわれたという観がないでもない。かく見、かく考えるとき、従来、ナルタン古版の開版といわれていたことが、実は文字通りの開版ではなく、完全な手書き写本か、あるいは経題のみの目録作製程度のことか、あるいはまた、目録によって經典・律書・論書等の集大成がなされたに過ぎないと見る事が出来るのではあるまいか。

4

かくて、ナルタン古版の開版と従来、いわれてきたことが、言葉の厳密な意味での開版でないとする、問題になることの第1は、明の成祖代、永樂8年(1410)に開版されたという永樂版がナルタン古版の中国における覆刻とされている点である¹⁴⁾。が、この点については、もし、いわゆるナルタン古版が現実に開版されたとするなら、それは、正に間接的には元朝の庇護のもとに成り立ったものであり、それを明朝が覆刻するということが考えられるであろうか。この故か、従来いわれる永樂版の開版については明史にも、また、明実録にも全く記載を見ることができないのである。第2は、蒙古文大蔵経が、その翻譯の底本はナルタン古版であるといわれている点である¹⁵⁾。ただし、このことについては、該大蔵経の成立はワデル(L. Austin Waddel)の説によれば、1310年とされており¹⁶⁾、ナルタン古版、もしくはそれに類するいわゆるチベット大蔵経がそれ以前に存在していなければならぬこととなり、年代的な矛盾を惹起することとなるのである。さらに、ナルタン新版も古版を基礎として、プトン目録その他を参考として成立したとされているが¹⁷⁾、開版された古版をもととするというのなら、古版から新版への年代的距りが400年以上にも及ぶという点を問題とせざるを得ないであろう。むしろ、新版成立の前年に開版されたデルゲ版との関係こそ、究明されなければならない。

以上、論じ来たったところから、結論的にいうなら、チベット大蔵経の彫造史は、甘部または甘・丹兩部の全巻に対する本格的な開版と見る限りにおいては、1683年の康熙版北京大蔵経にはじまり、チベット本土における開版は、1730年¹⁸⁾のデルゲ、引続いて翌年のナルタン版の開版という次第をと

るのではなからうか。そして、従来、開版を見たときとされている、ナルタン古版、ツェルパ版・リタ・永楽・万暦等の各版については、それらの各版が現存していないという事実からも、完全な形態における開版とは見る事ができないといえるのではなからうか。

附

大蔵経彫造年表			通史年表	
1320?	ナルタン古版の集成	現存せず	13C. 末	Hphags-pa, 忽必烈より主権を贈られ, Sa-skya 王朝成立
?	ツェルパ版集成	同上	1322	Bu-ston : Chos-hbyun 成立
?	リタン版集成	同上, 版本は1908年, リタンで焼失という	1346	Hu-lan Deb-ther 成立
			1357	Btsoñ-kha-pa 出生 (—1419)
			1367	元 (順帝) 滅亡
			1368	明太祖即位。明の圧迫から逃れるため, 蒙古と結ぶ。
			1391	第1代グライ, Dge-hdun-grub 出生 (-1475)
1410	永楽版完成	現存せず, ナルタン版の覆刻という	14C. 末~15C. 初	Btsoñ-kha-pa の宗教改革
			1478	Gshon-nu-dpal の Deb-ther 成立
			15C. 末	Dge-hdun-grub 初代グライとなり法王制成立
			15C. 中葉	蒙古王 Al-thañ から3代法王 Bsod-nams-rgya-mtsho (1543~1588) Dalai-bla-ma の称号贈らる
1602-5?	万暦版成立	現存せず	1616	清太祖即位
			17C. 中葉	5代グライ Blo-bsam-rgya-mtsho 固始汗より主権を贈られ, 法王即国王となる
			1661	明滅亡
			1662	蒙古源流成立
1683	北京版大蔵経開版		1687	Saṅs-rgyas-rgya-mtsho : 白瑠璃史成立
1730-31	デルゲ版・ナルタン新版など引続き開版さる チャーネ・プナカ・クムブン等の各版成立す		1720	清の世宗, 駐蔵大臣の制を布く
1932	ラサ版カンギュール部開版さる			

註

- 1) 深浦正文 “仏教聖典概論第4章西藏訳”・多田等観 “西藏大蔵経について” 同文館哲学大辞書 p. 518
 河口慧海 “西藏文典” 序文 p. 3
 青木文教 “西藏” 第2部西藏文化の新研究 p. 405
- 2) 橋本光宝校訂本 p. 150
- 3) 蒙古源流巻4
- 4) 江実訳本 p. 76
- 5) デプテルの記述によると, Bcom-ldan-pa の全書は出版されたものではなく, Snar-thañ に筆記体の作品が数部存するに過ぎないとされている。
- 6) Deb-ther vol. 6. Roerich 訳本 p. 337~339
- 7) Deb-ther vol. 6. Roerich 訳本 p. 336
- 8) 稲葉, 佐藤共訳本 p. 142
- 9) 波多野伯猷 “カーダム派史” 東北大学文学部研究年報第5号 p. 270
- 10) 1310年, 武宗の代に, 蒙古文大蔵経の完成を見たと言われているが, このことと, ナルタン古版の成立の関係もまた, 検討すべき事柄であろう。
- 11) 橋本光宝校訂本 p. 151
- 12) S. Chandra Das 校訂本 p. 202. デプテルの5巻にも, Śar-ba は智力が非常に大であったので, Bkaḥ-hgyur をすべて御心に収めておられたとある。
- 13) ナルタン古版の開版に引続き, ツェルバ版・リタン版の開版がなされたとはいうが, それらの版本は現存せず, また, 開版を史実として明らかにするためには, 資料不足の観がないでもない。
- 14) 多田等観上掲本
- 15) 金岡秀文 “蒙古大蔵経の成立過程” 仏教史学6巻1号 p. 48
- 16) Waddel “Lamaism” p. 158.
- 17) 多田等観上掲本
- 18) ただし, 1730年代はグライ7世, Skal-bzañ rgya-mtsho (1708—1758) の治下で, この頃, グライは1727年に清朝に対して叛乱を起こし, 7年間, 東チベットの Ka-ta に流されていた頃であり, チベット国内の政情は必ずしも平穏ではなかった。